International IC Association of Japan

IIAJ

NEWS NO.110

（社）国際IC日本協会機関誌
発行年月日 2006年4月4日
発行所 （社）国際IC日本協会
150-0031 東京都渋谷区桜丘町29-33
渋谷三信マンション505号
TEL:03-5459-5703 FAX:03-5459-5706
E-mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人 橋本 徹
編集人 長野 清志
頒 価 1部200円

特集『IC（MRA）と私』

今号ではIC（旧MRA）に出会われた方々の体験や、その影響、そして、その考え方に基づいたイニシアティブについてご紹介いたします。

自分が全ての源、自分から変化を起こす

森 文男（人材育成コンサルタント）

1950年、奄美大島で4人兄弟の3番目として生まれ、少年時代は父が市の助役という立場にいたため、幼いときから多くの人に囲まれ海や山や川と自然の中でのびのびと過ごしていました。

父は独学で自分の地位を作り上げた人だけに教育には大変熱心な人でしたから、そんな私は5歳からバイオリンを習い始めることになりました。しかし、おとなしくしていることさえ大変で、遊ぶことしか興味のない私の習い事は長くは続きませんでした。また、長女と長男が進学をするころに父は市長に選ばれておりましたが、それより子供たちの将来の為には多くの子供たちの中で競争をして教育された方が将来の為になると奄美大島を引っ越すことになりました。

中学時代はスポーツと音楽に夢中になり高校にも一応入学したものの、唯一の楽しみは友人とのバンドの練習という平凡な毎日を続けておりましたが、将来何をしたいのか何をしたらいいのかと迷いながら満足感や充実感などはありませんでした。

そんな中1966年の春、MRA国際移動学校のショーが来たときのことです。“何か変わった音楽グループが来るから”と友達に誘われ、暇つぶしにと思い行くことにしたのですが、それは私にとって大変衝撃的な体験でした。

同年代の若者たちがエネルギッシュに堂々と自分の意見を発言し行動し多くの人々に影響する姿を見て、それまでに体験したことのないような感動と興奮をおぼえ、その驚きで電気が走ったように体が震えました。

“これだ！”“これしかない！”

こんな世界があるとは夢にも想像していませんでした。求めていた音楽、情熱、国際的な活動、そしてリーダーシップにも強く心をひかれました。その日から鹿児島でのMRA活動への参加を決め、1年間父への説得を続け念願の移動学校への転校が実現しました。

私の人生はMRAからスタートしたようなもので、その考え方は人生の柱となっており、MRAで活動したことは私の誇りとしていつも心に残っています。

私にも13歳と20歳の子供がおりますが、この年になって思うことは39年前に出会ったMRAを人生の楽しかった思い出にするのでなく、1人でも多くの人たちにこの考え方を広めて行きたい、そして子供たちの未来が少しでも平和で住みやすい世界になってほしいと心から願っております。

■主な内容■

◆IC（MRA）と私・1-6
◆内なる声を聞く・7-8
◆スリランカ・レポート・8-9
◆日本ミニHOHOに参加して・10-11
◆IC国際会議のお知らせ・11
◆ICニュース・12

私は小さな石ころの一つにしかすぎません。それでも水に投げれば小さいながら必ず波紋は広がり、多くの人が集まればその波紋は波のように大きく影響していくと信じています。

“自分が全ての源、自分から変化を起こす”

平和な社会を創るために私にできることを続けていきたいと思います。

子供たちが夢やビジョンを持って生きる社会になるように。

世界中がお互いに協力しあい助け合う社会になるように。

お互い認め合い、愛し合う社会になるように。

我が家の行動指針

岡本　さくら（主婦）

2005年12月、子どもが犠牲となる事件、そして大企業の不正や偽装が連日のようにメディアで報道されていました。それを見ながら、これら全く違う種類の報道が重なったのは、偶然ではないように感じ始めていました。「バレなければよし」、「法律さえ掻い潜ればよし」と考える人たちを、社会的に成功を収めたという理由だけでリーダー的存在にしてしまい、何が正しいのかを考えず、盲目になってしまっている大人が多過ぎるのではないだろうか。そして、その結果としてそうした風潮に影響を受けた者たちが更に弱い者を襲うようになってきているのではないだろうか、と考えざるをえないようになっていったのです。

そんなときにIC専務理事の長野さんとモラルの低下について話し合いました。

悪いとは知りつつも弱い自分がいる、というのは誰にでも起こり得ることで、やはり各自がしっかりと考えなければならないのですが、実際にどうすれば各自が倫理観を忘れずにいられるのかを考えてみました。企業は社員向けに(塾でも教員用に)「行動指針」を掲げて、企業の進むべき道を示していますし、インターネットで検索してみると、家庭内の行動指針を作ろうと取り組む自治体もみつけました。「食事中にはテレビをつけない」、「二ヶ月に一度は家族全員で過ごすようにする」などの項目について教育者や議員によるさまざまな意見が公開されていました。

昔は「家訓」はそれぞれの家のもので、家庭毎で異なっていたのですから、全ての家庭に当てはまる行動指針は無理があるように思いました。そこで、それぞれの家庭で作ることが大事なポイントではないだろうかという話になりました。

とりあえず自分で作ってみようと思い、学校より帰宅した9歳の息子に、人として生きていくために大事なことを3つほど提起してもらい、それから11歳の娘が提起、そして翌朝には夫に最終決議を依頼し、5日程修正に要してから我が家で初めての行動指針が完成したのでした。契約書のように各自がサインするというアイディアも長野さんから頂きました。

それぞれが直筆のサインをし、家族全員で交わした初めての約束事となりました。この二ヶ月間我が家の冷蔵庫に貼り付けてあり、時折読み返しています。

この内容は必要に応じて変更されるかもしれませんし、何十年も変わらないかもしれません。それは各家庭で自由に決めれば、常に最適な行動指針になると思います。

友人に我が家の行動指針について話したところ、彼女は一人暮らしなので自分の行動指針を“New Year's Resolution（新年の抱負）”として書き出し、私に教えてくれました。更に、彼女が話した他の友人も、夫婦で今

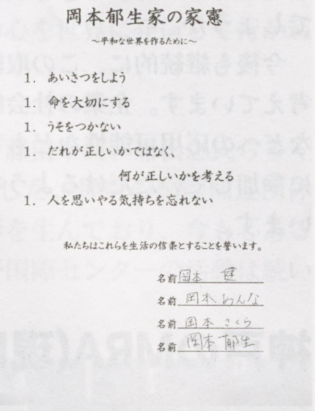
●岡本さん一家

年の決意を書き出し、それに込められた思いを友人と理解(share)しあったと聞きました。家族間だけではなく、お互いが何を大事に思って生きていこうとしているのかを知るためのコミュニケーション・ツールにもなるようです。

「我が家の行動指針」を作ったことによってすぐに目覚しい変化があるとは期待していませんが、互いの思いを確認できたこと自体が大きな成果だと思います。そしてもし今後、弱い自分が頭をもたげようとしたならば、自分や家族への誓いが破られないようにしたいと思います。

社会全体に警鐘が鳴らされている今だからこそ、一人ひとりが周りの人たちとつながりながら、思いを確かめ合い、より平和な世界に向かいたいと願っています。できるだけ多くの人に賛同、そして実践してもらいたいと思っていますので、皆さんのご意見・ご提案を是非お聴かせ下さい。ご自身の行動指針などがありましたらご紹介ください。よろしくお願いいたします。

連絡先　FAX：
03－5729－3518
または
03－5459－5706


岡本郁生家の家憲
～平和な世界を作るために～

1. あいさつをしよう
1. 命を大切にする
1. うそをつかない
1. だれが正しいかではなく、何が正しいかを考える
1. 人を思いやる気持ちを忘れない

私たちはこれらを生活の信条とすることを誓います。

名前 岡本 健
名前 岡本 ちなな
名前 岡本 さくら
名前 岡本 郁生

●岡本家の行動指針

落書き消去から生まれる壁面アート

福田　健一郎（早稲田大学政治経済学部政治学科3年）

山手線の車窓から、街並みに混じって落書きが多く見られることに、読者のみなさんはお気づきでしょうか？渋谷や原宿、池袋といった若者が集う街を中心に、壁面に無造作に書かれた落書きが多く目に付き、その風景は、お世辞にも見ていて心地よいものとはいえません。このような状況を見て、2005年8月に、私は大学の研究室の自主研究の一環として、研究室メンバー、立教大学の美術サークルと共に、豊島区の「協働事業提案制度」に基づく協働の申し出を行いました。内容は、「落書きを消し、地域の同意に基づく絵を新たに描く」という取組みを、池袋駅近くの壁面(電車の窓からは見えませんが・・)に行う、というものです。炎天下の中取り組んだこの試みは、それほど大規模なものではありませんでしたが、若者の地域貢献という意味では意義あるものだったのではないかと思います。

落書きで悩んでいる商店街に話を聞くと、街中の落書きは、様々な集団によって書かれており、ある種競争のような様相を呈しており、非常に小さな落書きであっても、すぐに消さないと周辺に広がる、というものでした。そのため、その商店街では、落書きをされた店のシャッターをアマチュアの芸術家に開放しており、非常に大きな効果を挙げています。

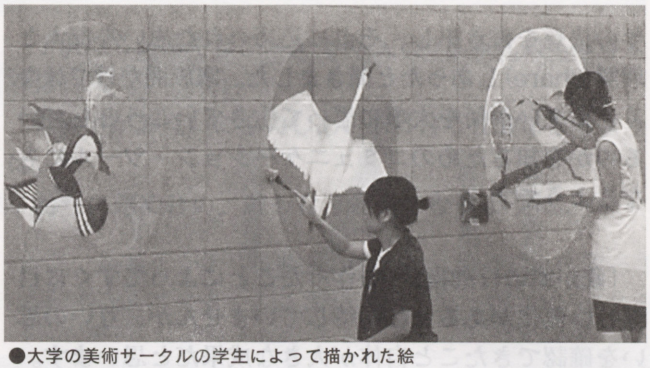
豊島区は2000～3000箇所の落書きを抱えており、個人の住宅へは対策を打ち出していましたが、それ以外は落書きが残ったままでした。そこで、前述の商店街のように、区の壁も芸術家に開放し、落書きを除去すればいいのでは、と考えました。それゆえ、私たちには、提案を通じて、「芸術に携わっている人の発表の機会を作りたい」ということと「住みよい地域の環境を景観の面から実現したい」という二つの核となる目標を設定しました。

実際の作業では、時間的な制約から、大学の美術サークルに引き受けてもらいましたが、普段屋外に作品を発表する機会はあまりなく、また普段慣れ親しんでいる街の問題解決にあたることの使命感から、積極的に取り組んでもらうことができました。また豊島区からも壁の使用許可や必要経費等快く応じていただくことができました。

今や、日本は少子高齢化の時代を迎え、いわゆる「団塊」の世代が会社から地域へ活動のフィールドを移しはじめるといわれています。そうしたときにいわゆる「地域コミュニティの崩壊」がそのまま放置されれば、様々な問題が発生しかねないことは容易に想像できます。これまでは誰か(行政かもしれないし、町内会かもしれません)が解決してくれたのかもしれません。しかし、今

では、行政は財政難、町内会は人手不足に悩まされているケースが多く、必ずしも地域の課題全てに手が回るとは限りません。そうしたときに、私たち一人ひとりが問題解決に進んで取り組むことが非常に重要なのではないでしょうか。

今後も継続的に、この取組みを発展させていきたいと考えています。企業の社会的責任に基づく地域貢献活動などへの応用可能性なども考えながら、より地域の方々に参加していただけるような仕組みを作れればと考えています。



●大学の美術サークルの学生によって描かれた絵

神戸のMRA(現IC)運動を支えた北野国際センター

山田　芳信（国際IC関西世話人会）

神戸のMRA運動

神戸のMRA運動は、1960年代に相馬雪香氏らのご協力により西ドイツの炭鉱労働者の自作自演による「ホフヌング（希望）」や、当時、石川島重工労働組合の柳澤錬造委員長の「一粒の麦」などの神戸公演を機に、住友義輝、原口忠次郎（神戸市長）、砂野仁（川崎重工）の各氏ら、かねてからMRAに参加していた多くの有志のお世話で始まりました。

私とMRAの出会いは、1970年4月にさかのぼります。大阪万博のエキスポランドの野外劇場で、神戸青年会議所の参加事業としてMRAシングアウト神戸が出演した際、広報担当としてお世話になったのが始まりで今日に至っています。

国際ボランティアはYMCAの今井鎮雄、兼松正氏のもとで10年、神戸青年会議所で11年、ロータリークラブで３４年と、お手伝いをさせていただいて来ました。特に震災後は、多くの障壁があり、なかなか思うように進みませんが、挫けそうになった時にはブックマン博士のことばを座右の銘にしてがんばっています。

世界各国の宗教を超えて

国際IC関西世話人会の事務所は、神戸の北野町異人館街の中心、神戸名所の風見鶏の館のすぐ東隣にある北野天満神社の境内にあります。

この北野天満神社は治承4年（1180年）に平清盛が都を京都から神戸の福原に遷した際、京都の天満宮から歓請した歴史ある神社です。

明治の神戸開港とともに外国人がこの北野山麓に多く住み、プロテスタントやカトリックの教会はもとより、ユダヤ教会、イスラムのモスク、インドのジャイナ教寺院、ロシア正教など世界各国の教会がこの一角に集まっており、各宗教のデパートといった地域ですが、この北野天満神社には、これらの宗教の違いを超えて多くの外国人が集まり、外国人の奉賛会長や実行委員会も生まれ、みんな仲良く神戸弁で活動しています。

北野国際センターは、このような国際的な環境に恵まれ、異和感のない自由な雰囲気の中で活動を続けてまいりました。

1983年から活動が本格化

北野国際センターは、神戸ならではのこのような土壌に育ち、1981年に開催された「ポートピア'81」から活動が始まりました。1983年には世界宗教の相互理解を目的に神戸に住む外国人たちの主導で北野国際まつりが始まり、これを全面的にサポートした北野天満神社のご厚意で北野国際センターは神社の境内に設置されたのです。

1983年に田嶋克己氏を中心とした神戸輸入促進フォーラムの同志が、グローバリズム運動を開始。第1回神戸国際交流まつりには、MRAメンバーを含む数多くのボランティアが集いました。この頃からMRAダイアローグ・イン・コウベが開催されるようになり、1992年には北野国際センターに、トム・ラムゼイ氏（オーストラリアMRA協会会長）ら海外からゲストを招

いて「心の国際交流」をテーマにパネルディスカッションが行われ、住友義輝国際MRA日本協会会長(当時)、前田美智子北野国際センター所長、沖田典子氏らが、市民を交えて熱心に話し合いました。

会報「心」に寄せられた平和のメッセージ

1987年に北野天満神社の会報に、フランク・ブックマン博士の「平和の心」が掲載されましたが、それ以来多くの賛同者から会報にメッセージが寄せられました。そのいくつかをご紹介しましょう。

＊関西ユダヤ協会のJ・グラック氏は、「あまり小さく固まらず、日本人も国際人、そして地球人であることの自覚を高める」

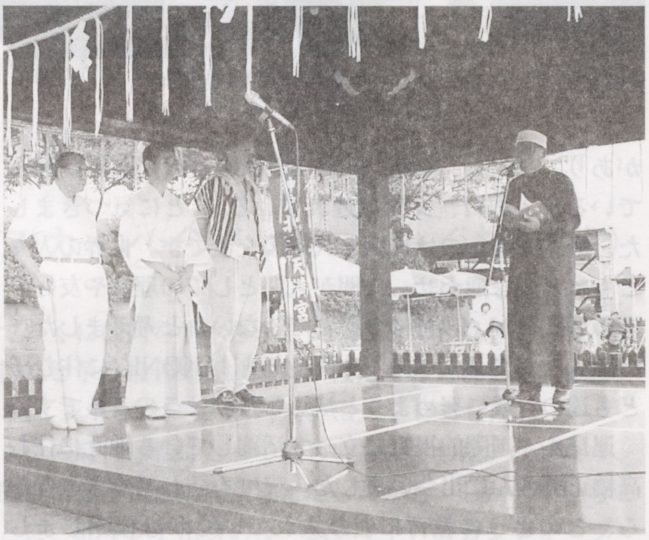
＊インド・ジャイナ寺院のカラニー氏は、「民族や宗教の違いを超えて、自らの良心で自己の変革が必要」

＊神戸ユニオン教会のホーデン牧師は「海兵隊と一緒にベトナムへ派遣されたが、敵同士が銃を向け合った時、お母さんの涙を考えずに引き金を引く戦争の愚劣さは言葉にしようがない」

＊KVGGの伊村智地子氏は、「知り合うのは簡単でも理解し合うことは難しい。人間の持つ素直さと根気と経験とグッドウィルに基いた言動が人の心に触れて初めて相互理解が芽生える」

＊孫中山記念館の王柏林副館長は「日本神道は過去において国家神道に利用された時期がありましたが、日本神道は八百萬の神々を敬い畏れ、一貫して他の宗教を容認し、尊重して和の精神をもったおおらかな多神教であり、この相互理解の心を世界に発信して行かねばなりません」

その他住友義輝、兼松正、藤田幸久、兼松恵氏ら多くのMRA関係者も執筆されました。神戸の国際関連団体に配布され、毎号大きな反響を生んでおり、今も心あるボランティアたちの手で北野国際センターの活動は続いています。



●北野天満神社で世界平和祈願のピースセレモニーを並んで斉行する神戸イスラム寺院のヤヒヤ・モニール神父と関西ユダヤ教会のマイケル・フォックス代表

世界に対してオープンになる「国際観光地HAKONE」に生きる子ども達の育成

鈴木　恒美(小学校教諭)

「兄弟の絆はいいけれど、命をもっと大切にした方がいいよ」と、Rさん。

「なぜ、同じ人間なのに争いがおきるのだろう。ぼくは世界のために、ぼくから世界中の人達と仲良くしなきゃいけない。」と、H君。

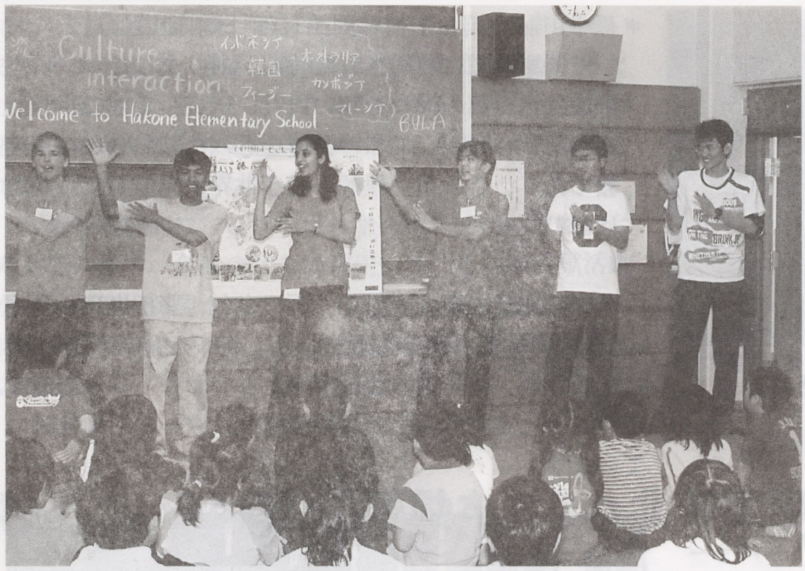
「外国では戦争や拉致が起きている。ぼくの力では何もできないけど、いけないことは正直に言おう」と、O君。

「曽我兄弟」の話を調べ終えた4年生は、あだ討ち物語から見事に「平和・命の尊さ」に結びつけて話し合えるように育ってきました。

出会い～故郷のような懐かしさを～

名誉や地位等をはるかに超越した「人間としての生命の輝き」を光らせ、「魅力ある人間教師でありたい」と、思いながら小学校に勤めてもう35年になります。

箱根(仙石原)に勤務した20年前、国際化を考える機会



●「アクション・フォー・ライフ」の青年達と交流する子供達

があり、「政治、経済、科学技術は国と国の関係が進んでいるが、教育、文化は遅れている」ことに気づきました。最も大切なのは人間と人間の交流です。世界の人々ともっと心を通わせ、人間が人間としての理解や友好を深めることが、教育に今必要ではないかと考えました。国際人として通用する「国際観光地HAKONE」に住む子ども達の育成に努めようと決意したのはこのころです。

運良く、国際的視野に立って活躍している地元に住む高橋正美さんに出会いました。幾度も訪ね話をききながら、どのように教育に取り入れていくかを模索しました。熱い思いで「箱根」を語る立派な人柄に触れることができました。何年か後に「自分の生き方の原点はMRAです」と言われたとき、故郷のような懐かしさを感じました。それは私の通った中学のそばにアジアセンターがあったからです。これが最初の出会いでした。

月に一度の小田原サークルに参加することによって、自信をもって国際理解教育に取り組めるようになりました。　アジアセンターの中山所長さん、二宮さんを初めとするサークルのみなさんや本部の長野さん等多くの方々が希望の光を注いでくださいました。私も子ども達も、輝いて堂々と前進することができました。

実践～小さい子ども達が地域を変えた～

箱根は世界中から観光客をひきつけるすばらしい国際観光地です。そこに私が勤務する箱根小学校があります。案内板が日本語ばかりなので、山の中で遭難しそうになった外国人客の話を聞いた子ども達は、「いつでも相手の立場に立ってやさしい思いやりでウェルカムすることがここに住む人の使命だよ」と、考えました。

そして訪れた外国人観光客が困らないように「思いやりのつまった地図」を作って、外国人や地域の土産物店やホテル等にも配ることを考えました。このようなボランティア活動を始めて、もう8年が経ちます。わずかな英語しか知らない子ども達が、思いやりをもって堂々と世界中の人をウェルカムする活動は、まず子ども自身を変え、学校教育や地域を変えていきました。学校現場では国際理解教育の必要性を認識し、学校全体で取り組めるように力を入れて教育したり、地域では外国語の看板がたくさん立てられたり、バスの運転手も優しく親切に対応する姿が見られたり、町は店の人用の外国語会話集を作ったりする等「思いやりのある箱根」へと少しずつ変わっていきました。子ども達は自分達の活動が地域に役立っていることを知り、「魅力のある箱根をいつまでも守りたい」と地域を誇るようになりました。世界中から感謝の手紙がたくさん届いています。もう一度あの子ども達に会いたいと再び来日した人もいます。

「アクション・フォー・ライフ(AFL)」や中国国際交流協会のみなさんをはじめとする海外の方々の来校が、さらに全校の子どもと教師の意識を変えていきました。感謝しております。2005年高橋正美さんによって、韓国とフランスで子ども達の活動が紹介されました。国や言葉が違っても「心」は結び合うことをよく知っている子どもたちは世界に向けて確実に漕ぎ始めました。

「曽我兄弟」を学習してきた4年生は、命をかんたんに絶つ今の世の中だから、祈り鶴に「平和・友好・Peace・Love」と書いて世界の人々に配ろうと準備をしています。

この祈り鶴が様々な国の空で、大きく羽ばたくことを願っています。

●観光客に話し掛ける子ども達

2001年9月11日のアメリカでのテロは19名のイスラム原理主義者によって引き起こされ、世界を恐怖に陥れました。しかし、イスラムの本当の教えと姿を理解する一助としてイギリスのICの方々が、IC(MRA)と出会ったイスラム教徒19名の方々の体験や考え方を紹介した『何故テロか—他に選択肢はないのだろうか？ /Why TERROR—is there no alternative？』という小冊子を作りました。その紹介文には、「私達は、増え続けるテロ、暴力、自爆テロの背景にある理由を本当に理解しているでしょうか？拡大する貧富の格差、難民の非常に苦しい状況、不正行為、何百万という人々が味わわされている屈辱や絶望、そして明らかな西側諸国の無関心や横暴、これらのすべてが、敵意や報復を生み出す土壌を作り出してきているのです。最大の脅威は武器ではありません。憎悪、怒り、不正、そして政治的腐敗などの源泉が、人々を武器へと駆り立てるのです」とあります。日本人に馴染みの浅いイスラム教への理解を深めて頂ければと、この小冊子を翻訳して順次ご紹介しています。第5回は、インドとパキスタンの間で長年にわたり紛争の続いているカシミールのイスラム教徒の方のストーリーです。

◇ICと私◇

内なる声を聞く

モハマド・アルタフ・カーン（インド・カシミール／法科学生）

私は1973年にスリナガールで生まれました。1988年に学校教育を終えた後、1996年にカシミール大学で理学士号を取り地元の新聞会社ウルドゥー紙に就職しました。以来、カシミール内外の複数の社会組織や政治団体で活動を行い、スリナガール内のハンジ・コミュニティー（ジェイラム川岸で生活している難民）の子供達に勉強を教えたりしました。このコミュニティーに学校を設立したかったのですが、蔓延する暴力のため実現はなりませんでした。

逮　捕

1997年、私はカシミール渓谷にいる過激主義者たちと関わりがあるとの理由で逮捕されました。拷問はデリーで一ヶ月間、そしてカシミールでは45日間におよびました。当時受けた肉体的な痛みと心的な苦悩は言葉で言い表すことはできません。その後は数々の刑務所に投獄され、あわせて2年間を獄中で過ごしました。この期間に私は、私に直接的な痛みや苦悩をもたらした当事者だけでなく、インドの全てに対して憎しみを抱くようになりました。1999年8月、やっと釈放されましたが、その時私は憎悪と怒りと失望を胸に抱えておりました。

偏見を克服

投獄という経験を通じて私に浮かんだ考えは、自分の人生をかけて、カシミールの私の同胞達の苦悩を和らげていくには何をすべきかということでした。そして不法行為と争う最善策は、法的手段だと考えました。私はプネ(インド)に行き、法科大学に入学しました。

この時代は私にとって厳しいものでした。なぜなら、胸に憎悪を抱え込んだままでしたから。しかし幸いなことに、北インド出身のルームメイト、ガガンディープ・シャーマ君のお陰で私は偏見を克服していくことができました。カシミールでのあの苦悩は無益であったのだと、私もまた他の人達と同様に利己的であったのだと、次第に強く思うようになっていきました。

その当時、あるカップルと知り合い、彼らからICを紹介されました。そして私はICの理念を知り、非常に感銘を受けました。これこそ私が求めていたものだと。このカップルの協力で、私は徐々に痛手から立ち直り始め、またカシミールの学識者達とプネのイスラム教徒達の間での和解調停を行うようになり、この調停は現在も続いています。

解決法を強要しない

カシミールの人達の苦悩を、ある個人またはある団体のせいだと非難するのは簡単なことです。ほとんどの人達はインドが敵だと思っています。しかし実際はもっと他の事情があります。多くのインド人は、カシミールで何が起きているのか知りません。私は一番大切なことは、既成概念が生み出す解決策を強要するのではなく、人と人との対話の機会を与え、相互理解を促し、自分自身の「内なる沈黙」に耳を傾けるということだと思いま

す。

この考えを持って、私は「アクション・フォー・ライフ(Action for Life)」チームに9ヶ月間参加しました。私は世界は一つの家族であり、皆が一緒に力を合わせれば地上に天国を築けると信じています。弁護士として一年目で仕事を辞めるのは容易ではありませんでしたが、これは神が私に望まれている仕事であり、神が私をお選びになったのだと確信しています。私には富がありませんが、もし神が私にここにいるようにと望まれているならば、富は神から与えられるでしょう。私は神に自分を捧げました。自分の内なる声を聞き、神からのお導きに従っております。

私の使命

・カシミール及びインドのその他の地方で、人道問題および社会正義に係る問題に取り組むこと
・異なるコミュニティーの格差をうめる架け橋となるべく、私自身が人的資源となり、コミュニティーの相互交流が活発になるための基盤を提供すること
・人権擁護活動家として、必要とする人々に無償で法律扶助を行うこと

私の展望

・暴力のない、清潔で、精神的にも経済的にも発展したカシミール
・良い社会を作るために、心身ともに一生懸命に取り組む若者たちが増えること
・カシミールでは、全ての人に対する平等が、いかなるプログラムにおいても約束されており、カシミールの行政機関や行政者が信頼でき、人々に対して責任を持っていること

カシミールに対する私の夢は実現可能なのです。

津波被害者の人たちの笑顔に接して

カピラ・バンダラ(ビジネスマン)

国際IC日本協会の皆様、先般はスリランカでの津波被害に見舞われた人々のために募金を集めて下さり、誠にありがとうございました。

私は皆様から頂いた募金を持って、去る2月19日にスリランカへ戻り、コロンボから車で2時間ぐらい南に走ったところのアルッツガマ(ALUTHGAMA)という町に義兄と共に、行って来ました。

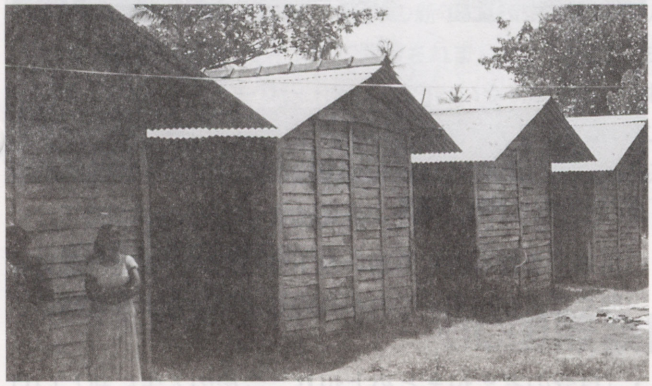
19日の朝7時頃コロンボを出てアルッツガマに向かいました。予定としては被害に遭った子ども達のためにコロンボでノートや鉛筆など、勉強するために必要な物を買った上で向かうつもりでしたが、朝早かったので買い物が出来ず、現地に着いてから側の町で買い物をすることにしました。朝9時頃に着くことができましたので、買い物の前に、子ども達や学校の責任者に会って、必要な物の確認をすることにしました。

アルッツガマのガンデヴィハラヤというお寺のお坊さんの話を聞いた結果、買おうと予定していた物を変更することにしました。彼の話では、津波後の一年の間に国内外の色々な団体から同じ物を続けてもらっているとのことでした。それはやはり子どもたちのための物です。ノートや鉛筆などは、あまるほどもらっているそうなので、他の学校にも廻しているようです。それで私達は子ども達が欲しがっている物をお坊さんに尋ねてみたところ、直接子ども達に会って話を聞いてみなさいと言われたので、仮設住宅があるキャンプに案内してもらいました。

すぐにキャンプに着くことができましたので子ども達やその両親に会いました。子ども達を集めて話を聞きましたが、遠慮してなかなか欲しいものを言い出さなかったのです。その時、私の中で「この人たちも一年

●支援物資を配るカピラさん(左から3番目)

前にはあなたと同じような普通の生活をしていた人達です」と言う声が聞こえたのです。それから子供一人ひとりと仲良く話をした結果、学校に行く時履いて行く靴や靴下などが必要なことが分かりました。靴や靴下などももらってはいたのですが白いスニーカーなどで、学校に履いて行くことは出来ないようでした。学校では女子が白い靴と白い靴下で男子が黒い靴と白い靴下と決まっているので、それを皆に買ってあげることにしました。また、普段家の回りを歩いたりする時のぞうりなども買ってあげることにしました。砂浜の近くにできた仮設住宅なので窓も無く、風も入らず、家の中は昼間でも真っ暗ですごく暑く、皆、主に外で過ごしているらしいのです。



●窓のない仮設住宅

子ども達の中でサッカーをしている子供がいて、他の靴ではなく出来ればサッカー靴を買ってくれないかと恥ずかしそうに頼んできました。もちろんと応えた時、嬉しそうに笑ってくれました。８歳ぐらいの女の子は、大好きだった自転車が波に流されてしまい、いつもさびしそうに海を見ていたそうなので、その女の子に話を聞きました。その子の親とも話をしましたが、親がまだしっかりした仕事が見つかっていないので、娘に自転車を買うどころか生活のことで頭がいっぱいらしいことが分かりました。早速、その子に自転車を買ってあげる約束もしました。

又、ここにいる赤ちゃんたちや妊娠中のお母さんたちの健康が心配されていると聞きましたので、出来るだけミルクパウダーや寝る時に使う蚊帳や赤ちゃんの物入れなどを買うことにしました。お母さんたちの話から、お米や食べるものはもらったりしても、それを料理する鍋等が不足していることが分かりましたので、それも買うことにしました。

隣の町に行って買い物が済んで暗くなる前に皆の所に帰って来ましたが、最初皆は私達が帰ってくるかどうか余り信用していなかったようです。とにかく子供たちが本当に欲しかったものをICの皆様のお陰で買ってあげることができました。子供たちや皆の笑顔を持って帰ることができました。私達はまた会える日を約束しながらコロンボに帰る事にしました。今回、先に買い物をしてしまわないで、皆に会って必要とする物を確認してから買えたことが皆のためになり、ほんとうに私達も嬉しかったです。

現在では津波の被害に遭った人たちの生活状況はそれほどひどくはありませんが、仕事が見つかるまではまだまだ大変だと思います。子ども達が塾に行きたくて困っていることや、行かせるお金がまったくない親の気持ちを考えると何かまだまだしてあげたいなと思いました。やがて住む家がもらえるのは確実ですが、もとの生活にもどるためにはまだまだ時間がかかるでしょう。

国際IC日本協会の皆様がスリランカの人々のために募金をして下さり本当に感謝しています。ありがとうございました。

●仮設住宅に住む被災した人々

スマトラ沖地震が引き起こした津波による被災者の方々のために皆様から寄せて頂いた義援金（計87,000円）を最も有効な形で活かしたいと願っていましたが、スリランカのカピラさんが帰国された際、上記の報告にありますように、被災者の方々のニーズに合致する物資を届けて頂くことができました。遅くなりまして恐縮ですが、改めてご協力下さった皆様とカピラさんにお礼申し上げますと共にご報告させて頂きます。　（IC事務局）

「家族のような絆が生まれる」

日本ミニHOHO《心を育てるネットワーク》in 福岡　に参加して

高橋　久子（主婦）

福岡の街を見下ろし、その外に広がる博多湾を一望のものとする、小高い丘に立つ「山の上ホテル」にて、３月４日から５日まで「第８回日本ミニＨＯＨＯ《心を育てるネットワーク》」（註参照）が開催されました。福岡ＩＣサークルを中心に、東京、名古屋、静岡、京都、岐阜から、また遠くイギリス、インド、ノルウェーから３名のお客様を迎え、総勢４０名が一堂に会しました。

ＨＯＨＯとは不思議な言葉ですが、インドのナガ族が、重要な議決を行う際に召集する、部族会議の名称に由来しています。小さな集まりと言う訳で、ミニＨＯＨＯと名付けられていますが、今、最も求められている“心を育てる”ことについてのネットワークになれば、という想いが込められています。

会の内容は、卓話（講演）、全員参加のストーリーテリング、「静かな時間」の三本の柱からなっています。

中でもストーリーテリングは、参加者全員の心を捉え、今回２６名の方々が初参加に拘らず、殆ど全員が心からの開放感と充実感を味わえたと語っています。ストーリーテリングは、３～５人程度を１グループとして、グループの全員が自分の人生を、テーマに従って語ると言うものです。一人が約１時間の持ち時間を独りで語り、また他の人の人生を聴く事により、多くの事を共感でき、生きていく上での力を与えられます。

今回のホスト役で、福岡ＩＣサークル世話人代表の讃井氏は、「普通のおじさん、おばさんに大変な人生のドラマがあると知り、あっと驚くばかりです」と語っています。また、讃井氏は、３人の外国からのゲストをご家庭に迎え入れ、家族全員での暖かいもてなしをして下さったことは、本当に有り難い事でした。ノルウェー、イギリス、インドのお客様にとって、日本での最高のおもてなしだったことでしょう。

ストーリーテリングについて、皆さんの感想を拾ってみると、

・「今まで人に話した事が無い事を、自然に話すことが出来、また心優しく聴いた下さった事。また、意見も聞くことが出来、これからの道が開けたように感じた」

●ミニHOHO in 福岡の参加者

・「自分の考えがまとめ上がり、今後の人生に新しい目標と勇気が持てる」

・「自分が何に影響されているのか、何を大事にしているかの確認が出来た。一人でする作業でなく、他の人の存在で自分を知る事が出来る。ただそこに居てくれるだけで・・・、感謝します」

・「人生の経験を共感できて素晴らしい。主婦が参加すること、シニアが参加することから、その経験の大きさに勇気と大きなエネルギーが与えられた事を実感しました」

・「とても感動的で、充実感のある体験でした。他の人のストーリーを聞いて、私は自分の中の恐れが、人生とはこうあるべき、という思い込みに基づくものだと気づきました。そしてもっと違った可能性を知る事が出来ました」

ストーリーテリングは、何回行っても素晴らしいと思います。一人ひとりの人生がドラマそのもので、一人ひとりの体験が胸に迫ります。自分の話も毎回変わって、改めて人生を見直すことが出来ます。

また、会全体の内容や交流での感想は・・・。

・「静かな時間の大切さ、関係を保つ努力、平和な社会を築くための信念など、遠い異国の方々が努力なさっているお話に、勇気づけられました」

・「貴重な体験を伺い、夫々皆さんのお人柄と、人生で何を大切に日々過ごされているかがじっくり伝わって

きて、ここに集まる方達の共通性が、心の輪をつないでいるのだと思えました」

・「人を愛する事から何事も始まると、改めて思いました。そして、人生に無駄は無いと言う一言、つらく寂しい時に思い出すと、元気になれそうです」

・一日バタバタと意地みたいに生きている私には、心のゆとりがなかったのですが、もっとゆっくり、もっとのびのび、もっと広くというキーワードを、静かな時間に感じました」

・「今日ここに来られた方々、まさに神の導きにより、世界を一つにするために来られた方達と言う、はっきりとした希望と確信を与えてくれました」

・「素晴らしいエネルギーと新しい始まりです。今撒かれた種が、何年かの後に立派な幹になることを感じます」

一泊二日の会が終わる頃には、皆打ち解けて、皆の顔が笑顔に輝いていました。初めて出会った人と、人生を分かち合えると言う喜びと開放感、充実感が皆の心に宿ったのでしょう。会場全体に何か暖かいものが湧き上がり、一つの家族のような絆が生まれるのを実感しました。

(註)2001年の年末から2002年の新年にかけてグローバルHOHOというIC国際会議が、世界５０ヶ国からの200名余りのIC関係者を集めてインドで開催されました。この際、お互いにより良く知り合う方法として、これまでの自分の人生を語り合う「ストーリー・テリング」という手法が用いられました。日本からの参加者たちがこの「ストーリー・テリング」の素晴らしさに着目し、日本でも行ってみようと、この会議の参加者を中心に有志を募り、実行委員会を結成し、年２回のペースで実験的な試みを重ねて来ました。今回初めて福岡で開催し、参加人数も増え、良い反応も得ることができたため、今後、参加者を広く募っていくこととしました。次回は、10月に開催予定。尚、ご関心のある方は、IC事務局までご連絡下さい。

《IC国際会議のお知らせ》

■第29回IC国際会議

《テーマ》『人生の夢と希望の実現に向けて―出会いを重ねて勇気を得よう―』

日時：2006年6月2日（金）～6月4日（日）

会場：マホロバ・マインズ・アネックス

神奈川県三浦市南下浦町上宮田3231　TEL：046－889－8900

本年もアクション・フォー・ライフの参加者を中心とした、ナイジェリア、ロシア、ラトビア、アメリカ、インドネシア、台湾からの青年を初め、様々な人種・宗教・年令・背景から成る多彩な参加者が参加される予定ですので、どうぞ奮ってご参加下さい。会議の詳細については、案内状をお送り致しますのでご覧下さい。

■第60回コーIC世界大会（スイス）

7月6日～8月17日　総合テーマ『個人の人格を高め、清廉な世界の実現につなげるために』

7月 6日～12日	「奉仕の精神、責任感、リーダーシップ」
7月14日～21日	「改革のための手段を学ぶ」
7月23日～29日	芸術会議「現在の在り方を変革するために」
7月31日～8月 5日	「世界経済における信頼と誠実性」
8月7日～17日	「クリーンで公正なアフリカを目指すための率直な対話」

※ご参加ご希望の方はICの事務局にご連絡下さい。

◇◇◇ICニュース◇◇◇

■マレーシアでのIC世界連絡調整会議

去る3月9日(木)から15日(水)にかけて世界各国から約３０名の参加者を得て、IC世界連絡調整会議が開催されました。日本からは、兼松恵さん(本年4月から同志社大大学院に入学)が参加しました。メインテーマは、「世界の国々の在り方や考え方に良い変化を与えるためにICとしてどのような貢献ができるか？　又、これを世界でのICのチーム作りの努力にどのようにリンク付けられるか？　特にアジアにおいて？」というもので、今後５年のICのアジアにまたがる開発プログラム(アクション)等についての可能性も模索されました。近年、カンボジア、ベトナム、インドネシア等アジアの国々でのIC活動が活発化してきており、世界のICとしてこのアジアでの動きを学ぼうと企画されたものです。会議の成果については、改めてご報告致します。

■3名のIC海外ゲストの来日

上述のIC世界連絡調整会議への参加に先立ち、IC国際評議委員会の委員を務めるイギリスのクレア・レゲットさん、インドで経営コンサルタントを務めるヴィシュワナサン氏、そしてノルウエーのオスロ大学で健康・環境・安全に関する問題のコーディネーターを務めるヨルフ・シルデ氏が去る3月3日から8日まで来日しました。マレーシアに集まる前に、アジアの国々の実際のIC活動の実体に触れたいということで、この3名は日本を選択し来日しました。前述の第８回ミニHOHO in福岡への参加を皮切りに、IC関係者との会合を重ね、多くの友人達との旧交を暖めると共に、新しい友人達との友情も結ばれ、海外ゲスト並びに日本側双方にとって実り多い訪問となりました。

入会のご案内

IC(Initiatives of Changeイニシアティブス・オブ・チェンジ、前身はＭＲＡ(Moral Re-Armament))は、1938年に ロンドンで発足して以来、対立する相手や国を変えたいと思うなら、先ず自分、そして、自国から変わるべきである」と言う理念に基づき、あらゆる民族や宗教や文化の根底に流れる共通の倫理観(モラル)を普遍的な絶対基準(正直、 純潔、無私、愛)にまとめ、それを基盤にして紛争解決に不可欠な信頼関係醸成のための橋渡しを、世界各国で進めてきました。

当国際IC日本協会は、1977年より毎年世界各国の代表を招いて国際会議を開催し、相互理解と信頼関係の醸成に努めてきた他、講演会や各種会合、各国のIC国際会議への参加、新しい東アジアの関係構築を図るための青年同士の交流等々内外で様々な事業を行っています。ご入会された方には各種行事案内、又、機関紙等をお送り致します。世界情勢を知り国際的な視野を得ることができます。

年会費　1.正会員 個人　6,000円　　2.賛助会員 個人　3,000円以上
　　法人　50,000円　　法人　50,000円以上

編集後記

相変わらず気持ちが暗くなるような様々な事件が連日のように報道されています。そこで、今号のニュースでは、そのような社会に希望の光を照らしてくれるようなIC会員の方々の活動をご紹介しました。又、本年６月のIC国際会議のテーマも、『人生の夢と希望の実現に向けて』といたしました。少しでも住みやすい社会、そして、世界を作りたいと望まれている多くの方々に是非ご参加頂きたいと思います。お互いのネットワークを広げ、共に希望の光を灯して参りましょう。(K.N.)

編集委員：長野 清志、高橋 久子、中嶋 邦子　翻訳協力：ベイリー 律子